

# Sense[大きな鎌が首をふる]

## ◆詩作——ロマン氏と私

### モルダウ

[スメタナ「モルダウ」の旋律に乗せて]

私の夢は識らず  
あの清冽に寄せて  
深森(みもり)の揺れる声を  
私さえも聴かない

夜半(よわ)に触れる冷たい頬は  
どの鳴き声よりも真白く  
いつか 君は 遠く遠く

振り返る日々は無為に  
まだ 今を超え行かぬ

私の夢は識らず、識らず  
私でさえも突き放して  
いつか 君に届くように  
私の夢は識らず  
あの清冽に寄せて

### Übel 2

私は私に疲れ果てています、  
それでも影は張りついている。  
私は泣きもせず遠くから観ています、

それでも心が信じている。  
手もとに引き付けた小さな鋏は、  
私のÜbelとなり、黄昏を裂開して  
謂れなきJubelを運んでくれる。

## Übel

切断しておくれ。  
吾が胸に誓いし悪[Übel]よ。  
この狭小なる単一性に包まれた  
限定的な白日を。

## 青とパスカル

整然たるターコイズ・ブルー。  
光が射したり、蔭になったりしている。  
刻は十六を迎えど、人々は彷徨っている。  
あの光や蔭とまるで同じように。  
迷い出ることをパスカルは言い表した。  
愛から迷い出ることだと確言した。  
そのような慈しみの眼[まなこ]の外に、  
私は棒のように突っ立っている。

## トロイメライ

朝 窓を開けて 四方(よも)の空が私を隠す  
きっといつも傍に 貴方は立っていてくれるから

そう 今か過去か 科戸の風が色を変えて  
もう 居ない筈の あなたはまだそこに立っていた

みな 過ぎるものに 亡骸を寄せてゆく

ただ思い返す温もりが 誰にもあって

みな その合間で 子どものように漂うだけ  
嗚呼 眠りつけば そこは紛れもなく私の世界

## Sense

大きな鎌が首をふる  
ヒステリー、  
惨劇は青の中で自由に揺れて。  
活発な静けさがもたらした  
私のJubellは、  
今も新しき讚美歌とともに  
流れてゆく。  
この空で  
私が狩り尽くした鳥たち、  
嗚呼、かわいそうに  
大きな鎌が首をふる。

## Peacock

(作: 10代の自分)

羽ばたいて幾度も墜ちるのは  
身体の底に眠るかなしさ  
時に痛みのように、深く疼いても  
それを埋(うず)める合鍵は そこに無い

培養槽を横切る生体反応  
ひとつも触れられぬまま、みんな過ぎてゆく

無数の眼を背負い 怯える孔雀の青

宿したかった空にも やがて、日は落ちる

宛ての無い思いを火にくべて

飾り羽が、私を見る

いつかすべての否定にまでも否定を

身体は翼の波間に沈んでも

## ◆断章——順不同

Jubelは笑わないが、Übelは薄ら笑いぐらいはしている。

思えばJubelも、私そのものである。考えてもみろ、よろこぶ主体はどれだ。

あわよくばこの蝶々が枝葉に停まりはしないかという些細なことまで、人は己に御せない何かを願いがちだ。

内語が止まらないが、うるさくない。私の思考は「言葉をあてにしている」から。(※フランシス・ポンジュ)

人間は、「強く」なれないがゆえに、「強い人」という幻覚をみる。

私は他の誰にも来られない、ただEigenheitな境地に来た。

湯舟に這入るのに、頭の向きを逆にしてみただけで、私はアリスがごとく鏡の国に迷い込んだ。そう、これだ。日常の単一性を「切断」しうる魔法。

私の想像力はなんとちっぽけだろう。常識的に起こり得ることしか思い描けない。

出廻らしの紅茶に根性論を言う。「まだだ、まだお前はやれるだろう」と。然し仕組みが対応していないのである。

適当に手に取ったその辺の道具でも、人を傷つけられるのだから、始末が悪い。

戒律そのものが本質なのではなく、それは本質に近づくために用意されたテンプレートである、という可能性。

「すべてを預けられる」と思える地点があると、しばしば人間は夢想する。恋愛でも、宗教でも、同じことである。

私の顔や姿の写真よりも、私が己の思想について書き出した一文などをみているほうが「私の肖像を眺めている」という気持ちになる。外面はおまけかもしれない。

存外面白いものがあるのに、私たちはそれらの殆どを無視し[環世界の外にはじき出し]ている。

私が何でもかんでも疑うから、私のことすら、わからなくなってしまう。

「私らしくない」というのは、「主体的でない」とも言い換えられる。正負どちらの理由にしる、誰それがこうしたから自分はこうする、等と影響で行動を決めるのはまさに「主体的でない」。

最適解はいつも更新されてゆく。己の流動性を侮ってはならない。

私にとって哲学の読書は、河原でふるいをふるって鉱石のさざれ石を探しているみたいな行為である。全体像はともかくとして、その中から己にとって光るものを見出しているのだ。